2019年度　社会福祉法人たまご会　事業報告書

障害者活動センターたまご

＜情勢および事業全体総括＞

2019年度の障害者活動センターたまごを総括するとき、年度末になり発生した新型コロナウイルス感染について触れざるを得ないであろう。2020年に入った1月頃から新型肺炎と呼ばれ懸念されてきたが、その後国内で感染は全国的に拡がり、法人でもその対応に追われることとなった。施設内での衛生管理の徹底、利用者と家族、職員への健康管理、行動の自粛など本格的な動きは4月に入ってからだが、3月に入ったころから自主的に施設に通うことを控える方が数名現れており、数に変動はあるがその現象は現在でも継続している。

さて、2019年度の障害者活動センターたまごであるが、稼働日は2018年度の272日に比べ264日と8日少なかった。その理由は、西日本豪雨災害に伴う開所日を運営的な側面から増やした経緯があったが、結果は、述べ利用者数で11437人（2018年度）に対し11463人（2020年）と26人の増加で終わった。新規の利用者は計6名で、内訳は生活5名・多機能1名であった。日々の健康管理に課題のある利用者も多く、今年度も嘱託医による健康相談日（施設訪問による）を月に1回設け、あわせてこれまでと同様に血液検査、健康診断（各年1回）を実施した。各事業所の課題でも触れるが、新規の利用者の獲得には今年度も定期的な特別支援学校への訪問や、相談支援事業所への情報の提供を行ってきた経緯があるが、今後も重点的な課題であることから、新たな施策を含めた取り組みが必要である。

施設整備の面では、開所当初から使用していた送迎車両3台が老朽化のため廃車となり、新規の車両を導入する手続きを行った。施設内でも空調設備や照明機器などをはじめとした設備面での対応期限が近づいてきており、その課題は20年度にも継続することとなる。

法人にとって2つ目となる生活施設（グループホーム）の建設にも、土地の取得から造成など大きな動きがあった年であった。2008年開始のケアホームたまごから10年が過ぎ、この間に利用者とその家族の高齢化を背景とした要望は、年を増すごとに増える傾向にあり、新しいグループホームへの準備は今後本格化していく見通しである。

最後に、新型コロナウイルス感染の影響は、今後わたしたちの社会、生活様式を大きく変えていくことが考えられている。この間の情勢を俯瞰したとき、もっとも象徴的な出来事を挙げるならば、我が国の医療行政の混乱ぶりではないだろうか。これまで医療を財源的な問題で削減してきた経緯があるが、この度の問題を解決する手立ては、財源を増やすことでしか対応できないことは皮肉な結果である。いっぽう社会保障、とりわけ障害者福祉に目を転じていくとどうなのであろうか。我々の行うべき事業が、効率を優先した制度設計では、今後為し得ないことを改めて痛感する出来事であったように思う。

生活介護センターたまご（生活介護事業）

今年度5名の新規利用者があった。いずれの方も車イスの利用者で、入浴サービスを利用されており、うち2名に関しては常時医療的なケアが必要な方である。

延べ利用者数は5333人（2018年度）に対し、5209人（2019年度）と124人の減少があったが、その理由は昨年度に比べ稼働日が8日少ないためである。一方で、日平均は19.6人であるのに対し19.7人であり、稼働率を見ると定員に対し98％から99％に増えた経緯がある。その点から、生活介護センターたまごが、地域の中で重症心身（重度）の利用者と家族にとって受け皿として機能していることがうかがえる。

　課題としては、入院を伴う健康管理の問題、とりわけ家庭内での支援が困難になりつつある現状が顕在化している点である。引き続き、相談支援専門員を中心とした制度、並びに社会資源の活用に留意する必要がある。

障害者活動センターたまご（多機能型：生活介護事業・就労継続Ｂ型事業）

　生活介護事業（定員30名）と就労継続支援B型事業（定員10名）の多機能型からなる障害者活動センターたまごの課題は慢性的な定員割れである。4月より新規利用者（B型）

1名が加わることになった。生活介護事業の延べ利用者数は5401人（2018年度）に対し、5251人（2019年度）と150人の増、就労継続支援B型事業の延べ利用者数は両年とも853人であった。稼働率は68％（生活介護）32％（B型）であった。この点の対策については

総括で触れてあるとおり、引き続き外部への情報の発信に努める必要がある。施設見学、実習への問い合わせは増えていることから、施設の中で行われる活動を、さらに魅力あるものにしていく必要を強く感じる。

　2020年2月後半より、新型コロナウイルス感染予防対策のため、これまで隔週で参加していたシビックマーケットや、いきいきサロンなどでの外部販売が中止になったため、菓子製造の生産量、それに伴う工賃の減少などが喫緊の課題である。

レスパイトルームたまご（短気入所事業）

一昨年11月より定員4名から5名に変更したこともあり、延べ利用者数は1489人（2018年度）に対し、1504人（2019年度）と微増した。日平均も両年とも4.1人である。利用の傾向は、稼働予定日以外での緊急的な受け入れはあるものの、その大半が曜日によって利用者も固定しており、そのことは短期入所が本人（主には家族）にとっての生活習慣になっている現状があるのではないかと考えられる。

今年度も、季節的に（主に冬季）体調不良によるキャンセルが顕著にみられる月もあった。新型コロナウイルス感染に伴い、利用を控えている利用者も2月以降見られるようになっており、その傾向は現在でも変わっていない。

ケアホームたまご（共同生活援助事業）

今年度も8名の利用、366日の稼働で推移した。1年間を3名の夜間支援員が支えており、慢性的な人員不足に備えるべく9月から4名の体制にした経緯がある。しかし、現在は1名が退職し、人員の確保（主に夜間支援員）の困難さは、新規グループホーム（黒瀬町）にも繋がる課題であることは言うまでもない。延べ利用者数は2552人（2018度）に対し、2830人（2019年度）利用者の入院などがあったものの278人の増加があり、1日の利用平均も7.0人から7.7人に増えた経緯がある。理由は、週末の帰宅を行う機会が減少していることが考えられ、そのことは家族の過程での支援がより困難になっている現状が伺える。

継続した課題として、利用者の高齢化に伴い、医療との関わりが増してきていることが挙げられる。一つの疾病をきっかけに複数の通院が必要になるケースは珍しくない。服薬、健康管理はもちろんだが、通院（救急搬送を含め）介助について、現状では日中の生活支援員（生活介護など）が行なうことがほとんどであり、限られた人員のなかで対応をせざるを得ない現状がある。

衛生管理・建物維持管理

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 害虫駆除・調査 | 年6回（5・7・9・11・1・3月） |
|  | 浄化槽点検 | 毎月1回 |
|  | 浄化槽汚物汲取り | 年1回（平成29年4月） |
|  | エレベーター点検 | 毎月1回（遠隔監視メンテナンス） |
|  | エレベーター年次点検 | 年1回（平成30年11月） |
|  | 水槽清掃 | 年1回（平成30年11月） |
|  | 建物定期検査 | 年1回（平成30年11月） |
|  | 消防設備点検 | 年2回（平成30年4・10月） |
|  | 電気設備点検 | 年6回（5・7・9・11・1・3月） |